

第九卷之戀

野邊之春駒

第六號



國信



兄弟野邊の春駒

第六號

田鶴も亦醜く顔にありてより若駒吉も嫌はれて愛想盡しをさねやうかと心か解め  
 は嫉妬も深く近所の婦人と駒吉が口を利ても聞耳立て情由でもあるかど氣を廻し  
 た腹の出る不潔い顔で一才出るにも付て來れば夏蠅もあれば外聞も悪く殊に駒吉の  
 買出しをとり相手は都て婦人あるを斯小喧しく言きては稼業にさへも差支へるより  
 細情く思案をとりて行先長き若る身そらでこんな化物同様な女と生涯連添も考へ  
 て見まば馬鹿を理窟然らうのと言て離縁を仕たとも送り付る宅もあければ寧自分が身  
 を引て他所で稼ぐの外はあしと不人情な心を決し買出物返る杯と種々に言なし  
 て目ほしい衣類を残りも持出し質屋を口説て借た金に路費が出来たと窮に歡ひお田  
 鶴を可部へ置去にして或日該地を立退たを田鶴は夫と氣は付ね歸りの遅いは何  
 れでの浮氣も事でもして居るかど例の嫉妬で氣が落着ねば心當りを捜し歩行を日數  
 經とも在家の知れぬお宿は此身を振捨て家出をしたに相違ないと心付てはみもよも



わられず狂氣の如く騒ぎ立ててもお田鶴と常に手前勝手近所の交際などもせねば誰  
 とて憐む者もなく今は詮方盡果て僅の家財を賣代なし疎遠にすれど大坂には従弟の  
 居るを心當に餘儀なく彼地へ赴は又駒吉の可部を去て長州路へと心ざし同國下の關  
 に至此所ば繁化の場所なれば身の有附もあらんかと彼方此方と奔走するうちフト途  
 中て出會たれ以前長崎の或異人館に長く馬丁に住込で渾号を片眼久と呼れた大久保  
 久吉(六十)といふ者にて互ひに無事を歡ぶうち久吉の形風俗お目を着て駒さん  
 お前はどらういふ譯で來なすつたのか知らねへが私も今の稻荷町にちいさな宅を持て  
 居れば久し振て長崎の咄しも種々聞たいからママ來なせへと誘はれ渡りに船と思つ  
 た故尻又付つゝ至りて見れば一寸小奇麗な住居にて宅に廿六七の女房が一個居て  
 垢脱のした客体から世辭を並べる塩梅がどろ見ても泥水を飲た上りや思はるゝが本  
 夫は目顔堪吞込てママ有合のね肴でと直様かんを付て出せの駒さん介意のねへ宅た  
 今日のもつくり飲ながら咄しを聞かうと久吉が底意もあらぬもてなし振に駒吉も介

意持す厭つ酬れつす依程よは  
 や微酔の久吉が打笑ながらコ  
 ヲ駒さん此身ア長崎で別れて  
 後此地は是と止ぬれど博奕の  
 外に稼業を知らず併渾号が世  
 間る通り何所の土場でも片眼  
 が來たど人にも知られるやう  
 におれを結句今でそ活計も氣  
 安く此稻荷町の年明娼妓お初  
 どいふを障アにして何様やら  
 斯や對道で居核が見ればお前  
 の形風俗旦那乃用で此土地へ





來ぬ様子とも見へぬへが何か云のゝる譯かと星をさへれて駒吉と匿して氣合を悪く  
するより打明咄しが能からふと我が身の上の概畧淺箇様々と物詰りどぞや兄貴の  
周旋を身の有附をど折入て頼免を其所と放蕩稼業丈け善悪とそに依頼をぬら後へは  
引かぬと言ふ質合も一も二もなく承知して然らぬ筋で逃て來たから今更堅氣な  
奉公をグズグズしても居られぬへまア鬼も角も此身の宅も當分遊んを居るが能うの  
うち何様なぬふからと言ぬに這方は力を得て其儘此家の食客となす二月三日と日  
城送ぬうち駒吉も長崎以來種々放蕩に身と持崩れ博奕にむりは手も出ささん  
だが悪い道にと染易く且博徒が立入をば習ふよりと慣るゝ疾く殊更物に伶俐さ  
質ゆゑ早晩立派を博奕打とや久吉よさし繼での兄イ株と人に立られ小銭を延ば  
やうにむつたが根が油順の人望がそれを久吉のみか女房が初も實の弟乃やうと思ひ  
俱に深切城盡して居ぬが什麼此れ初乃履屐聞くに先頃ね仲が無城間違へ測ら手厚  
い世話にぬつぬる彼小豆島乃小池村ある遠藤彌右衛門の娘よて吉五郎といふ者と浮

氣の末に宅を蹴出し諸方をさまよひ廻つて後終にと渠に欺されて此稻荷町の貸座敷  
熊田仙吉方へ身を沈めぬ其前借は何十圓かを吉五郎が握つた儘行方知れずぬつぬ故  
始めて情夫の悪心が解り身の不所存を後悔して頻りに古郷へ残しぬ親が暮しくは  
思へどを行行せぬ籠の鳥殊更親父は物堅なれを家出城しぬ上此やぬな賤しい勤城  
すゑ事城假令知らせて遣れぬ身て免す氣質の人であけを却けて苦勞を増やせる乃  
みか世間の手前も面目おけれを絶て一度の便りも捨す縁あつて久吉と終ふ夫婦な  
つた事まで断し乃序に是くと我が身の上を打明て言を駒吉は妹お仲が世話にまほ  
ぬは夢にぞ知らぬが初が故郷の親の事を言出しての断しを聞き今まで忘れ果て居  
た我が親の事妹お事が忽地に胸に浮み覺る涙をハラと落と城れ初と見るより  
怪しみて駒さん何城れ泣のだと訝り問きて匿むにぐしなや實之私も斯くと身の上断  
し城明してうらと互ひに心根に想像ぬぐく實意を盡し合ふ城譯を知らざる固焼連  
は二個の中が訝しいなど一瞬をするもぬる程に益々夫婦が深切を扱ぬ振に駒吉を



ッヒ放心く下り關に長逗留をして居るうち明治十年の春に至り彼西南の暴舉起  
りて既に東京其他よりも諸隊の出張あるに付て此下の關も非常の雜沓これに依  
りて次吉も軍夫の下請負となり戦地へ赴く事となり幸に駒吉と算筆も達し殊に心も  
利たる者ゆゑ手先に使ふに備強とて渠を勧めて俱に召連何れの隊にか隨行して修  
羅乃街に至りつゝ彈丸烈しく飛交險中を請持の軍夫を指揮して兵糧等の他彈藥など  
を手拔なきやや指廻すに躬苦戰に及ぶ時には九死を出て一生を保つが如き場合を  
多く或は野に伏し山に寐るなど危嶮を慣ては苦と思はず後之面白半分頻りに戰  
地を奔走するうち或日官軍よて設けられたる一策忽地りの圖中りて逃る賊徒を道  
さりと大小砲を打掛く息をも吐せず追迫す兎角して山懐な一村落に至りしか  
ば片端よりして火を放ち爰にも足を停させしむるに村人等は駭いて右往左往に散  
亂す其中に村外れな最不潔氣ある白屋に年餘七十餘と見ゆる一個の老爺  
が鳥鷲付居あるを士官が疾く見認められ何とて此火に逃遁せぬ焼死ふぞと壁掛られ滋

慌忙けと老爺は腰を打抜せしにや立事ならぬを憐みて誰かある那老人を疾助  
よと言はるゝ所へ來合せぬ駒吉が心得ましたと言ふより速く猛火乃中へ飛入て辛く  
老爺を救出し其儘自己が陣小屋へ進行し焚出し燬する人夫等に姑く渠を預置死取て  
かへして我が持場の指揮萬端終つて後再び焚出し小屋へ歸り以前乃老爺に物なと喚  
せ種ぐ勞アさとしながらの身の上を尋ねるを嬉し涙と俱に老爺は額を地に摺  
付る壯年なれかたに似合ぬは深切な其お尋ね私は水瀬太右衛門(七十)とて水香の  
め瘦百姓尤も以前は斯までの貧窮人でも有りはしなんだが先年老婆が死で後倅幾  
右衛門へ嫁賃貰ひ氣安々老を送りたいと思つた事は空たのみにて倅が放蕩始め  
僅の田畠も賣盡し家中荒した其揚句に私と嫁と嫁振捨て何所へ行たかういれ知す  
併嫁の氣立が能く面倒を見て呉れた故貧苦中をも活計で居るうち又その嫁が病死し  
て杖に離れた盲目も同然今とあつてと破落者でも倅が居ぬら力とを若なる事あら  
ぬかと思へど死たか生たか知れず老衰弱私身は實に村で乃厄介者死たが増うと



且暮に思痴と云はして居まされとサア宅へ火が掛はぬと見てと矢張命が惜く逃出し  
 ぬにも身体が利ねを只はごとくとして居る所を貴公のね蔭で助られ命拾はれ城爲  
 ましたと涙ながら手残合せ伏拜する、嘶しのうちに破落者でも悴が居たら又力に  
 をならぬかと言た辭が胸よこぬへ我を故郷親残し妹の行方の知れざるよと只身  
 乃恥をのみ厭は旅りら旅へ徒らに幾年月送るやち絶て一度の安否も問はず果て仇  
 かゝ色よ迷ひ親や妹の上は更あらず身さへ忘る、不良心斯は不孝の此身残を親之憎し  
 と思はれず此老人の辭の如く然とて紫トて在すべしれ仲は無事で在家が知る最早故  
 郷へ歸りしか若然となくを兄妹が一名をお側に附添えず漸次に老行くは兩親のね心  
 細くと如何あらんと爰も先非を悔んでと飛でも歸りたされども人夫の指揮も虚間を  
 死身と自儘に戦地は退かれずア、何としぬ物で知らふと思ぬも付てと太右衛門が頼  
 りぬ身身の痛ましきに貯への金残許り悪んで歸り道たぬ後を歸心遣ふ方おけれども  
 長崎小倉可部など乃不義理の廉を償つて商暗がらぬ身体にあらぬを世間情てと歸國

を仕がぬし夫には金が先立譯  
 と既に思案を決してからは千  
 軍万馬往來の中も分捕りの  
 他の所得を多き城戦地には  
 てと遣道なく皆石瓦同様に思  
 へを博奕乃み城樂しみとすれ  
 と駒吉之悔悟の後は是等群  
 よ立入らず蓄財工夫を乃みし  
 て居るを仲間のものが打笑ひ  
 て今にツドンと彈丸が中れば  
 生て歸れぬ身を持ながら馬鹿  
 赤野郎と口ぐよ言ふを駒吉





は耳にを止す彼是するやち數百圓の貯金も出來たころ終に暴舉り平定して凱歌歌唱する時にいたり駒吉は久吉と俱に是非大坂まで隨行をなすべきの譯をせよと云ふ仔細を云ふと久吉に打明て咄し鹿兒島切よて暇を貰ひ何より先にお鶴の安危が頭で心に懸る故先長崎へとおと渡り照藏方の裏口から免なさいと障子を明るをハイと言つ、何氣なく立出候お米が顔見合せ此野郎がと腹が立ば物成も言はず奥へ這入を駒吉慌て呼止め其れ怒りと道理私も二度と此土地へ來られぬ義理ではあはせんがは夫婦さまにね目に懸り積るお詫り致たさに高い敷居を跨ぎ越し面も冠らず上りました鐵面皮とも思し召さふが何卒此旨親方へと氣の毒さすよ言ぬ辭を一室は裡にて照藏が聞付お米何だか知らねへが詫成するどて來たと云ふなら這方へ上げて遣るが能と聲を掛けおツンとして義理人情も辨へないおんお奴を心引入きて餘計乃腹を立ふとア叩き歸して鹽花でも恃て遣らふとね米が言ふ城ハテ然せすと、本夫の辭よそんなら何様をも勝手よお爲と言ぬを駒吉は鹽にして臺所まで這上り問の惡さ

うに板の間より兩手を突きお夫婦さまへ對しては合符る面皮をけりは坊ねと假令ね袖よすがつてありとね詫をせねば心も濟ねばお叱り受るを覺悟にて推て參つた一通でね腹も立ふが聞て下すい先年ね鶴は大病と聞て居ながら餘所に見て那吉松と逃去たる後お様子は云ふと小倉で悪法をういた事より可部に至りて吉松乃不具になつたをみ捨て立退き彼下は關は久吉方に厄介になつて居るうち這回西南の事件に付き九州を經て鹿兒島まで至りし事の爲体を箇様く物語既又戰地で太右衛門といぬ老夫は危急救むし時不孝お子でも側に居たらと渠乃言たが應にまたへ其所より先非を後悔してと頻りに親が懐しさに恥外聞も厭はずして歸國と心は決したれども是まで所くでの不都合を詫て償とさるうちは故郷へのみを急がねば夫等乃事をも願ひぬさにお詫かたく上りましぬが先何よりもお鶴は安危私等故に變死でも萬一致しは爲ま坊んかと始終を演る辭は顛末偽りならず思はるれば始の程と照藏が荒瀬ともせず聞て居あるも終に面を和らげて改心したとあるからと別に叱言の云やぢもなければ



只憫然なほお鶴の成行全く變死と言ふではなけれどお前方が家山の後小倉で乃惡法  
 を上田方から四季亭へ掛合手紙が来たといぬ夫等の事まで渠が聞込み情をし男不實  
 阿魔と言續にして死だ故吉松の身も惡病が發じ不具な身体に於けた乃を大かゝ夫等  
 の報んであらふ併お鶴の亡骸と可なりに手厚く葬式も做し又岡山の古田へも委細を  
 報知て遣ふ所知一さんも怒り解け貸金証書に回向料を添て贈つて遣られた杯は  
 了し様子成委し々断すを聞事毎に駒吉は身を祈らるゝ程苦しむに責てはお鶴の位牌  
 もあつと心得違ひ成説はせざとて頓て佛壇に打對せ世よ在る人に物言ぬ如く身の非  
 成並べて詫入たる後まゝ照藏の前に出休四季亭で彼一件では立腹は言ぬまでもな  
 く損を掛ぬが氣の毒も多幸の戰地で蓄へた金圓の持合せを預れをどうか品よく兄貴  
 から断しを付てと頼むにぞ照藏と看込で直ぐは四季亭方へ赴き今度駒吉が改心して  
 久くよて此地へ参り私うら詫を言入れぬ上吉松の借用金其外の入費成も償ひぬい  
 どの事柄を咄せを成程吉松一件ではどんだ馬鹿を見せられたれを今が今まで駒吉を

怨み會ぬら嚴しく掛合はふと思つては居たれと悔悟したとて詫られてと彼是言ぬべ  
 さやぢもなく殊に吉松が不具になり其上は情夫に捨られて餘儀なく大坂乃從弟の許  
 へ頼つて行て厄介にあると其從弟が律義者にて先頃店へ手紙を送り此方に不義理  
 をしぬ吉松を無沙汰に預り置れぬとの趣きと言越しぬと癪人になつた吉松を返さ  
 れぬ所が實之厄介那婦と憎く思へども從弟の仕やぢが實明ゆる貸金証書と郵便にて  
 其後吳て仕舞ぬ程も今更となり駒吉どのから償はれるよも及ばぬば其改心が變せ  
 ぬやぢよ吳く論して進せなさきと義氣ある辭も照藏は感下一先四季亭を立歸りて  
 返答振を云くと駒吉に咄せば切離れ乃能死主人は辭を駒吉を深々感下此上は私が行  
 て自身に詫も言入たければ獨りで行之勢居も高し苦勞ながら今一度同道しては下  
 さるまいかと言ふと照藏一議及はず又駒吉を召連て四季亭方へ赴きば面目なげに  
 駒吉は主人の前に頭下げ其身は罪を謝したる上豫て不義理にして置九揚代金の温  
 溜の外に別段金を三十圓さし出し是は如何にせ些少なきと吉松が逃亡中に花代の万



分一とも思ふては受納下さるや言ふを主人と聞かへず揚代金の勘定と受取も致  
 さふが吉松が出稼中の貸金証書を返しぬ程ゆへ此花代の心配にと差戻をを押し返  
 し貴公も多くの損を掛ぬを皆私から仕出しぬ事夫に僅け此金さへ受ぬと仰下され  
 てとお詫の廉も立ませぬを迷惑でも是丈と何分は受納下さるや言ふに頻りに頼め  
 ば照藏も傍から辭滅添ぬる故此上はとて四季亭の主人は金を受納め酒など出して盤  
 應たるに駒吉を安堵して程な々其場立歸りて後又照藏に周旋を頼んで西恩寺ある  
 れ鶴の墓地へ立派ある石碑設け築が追善供養の爲とて或日該寺よて大法會成營み  
 以前お鶴が懇意よした藝妓或之判問おを落も亦く招濟せ是等には金三圓宛り乃他  
 馴染にした輩へも皆夫々物に恵めを其日墓前に群參おす丸山中の別品揃ひを見  
 物するどて遣て來る彌次馬連を又多く手向乃裕も石碑をば填ぬかやの況状おを  
 又諸方々で回向料花料杯とて贈る中に四季亭よりは香奠なやとて日外の三十圓を判  
 金にして送つぬ故是を如何もと辭退したれど寸志なりとて聞入れぬば餘儀なや受

ぬる夫等の金は悉く寺へ納めて永くお鶴の香花の料とし萬々事乃濟ぬる後又借照  
 藏夫婦にはお鶴が世話におけたる禮とて金を百圓出して渡そを照藏と手にだに觸す  
 此身に義理と入らぬへと返を種々押問答して終にお米も其金を受させの他懇意  
 の先ぐを抜目あさや手を届かぬれば一時駒吉の不品行を鷲のやうに風聞爲たる  
 を悔悟乃体は何れを感して狭い土地丈好評判を世間へばつと弘まらたきを先長崎は  
 是で能おれど小倉の事が心配ゆる又照藏も同道を頼むと安ん事だと承知滅したれを  
 控んなら翌日にも出立といふを夫と餘りに性急とお米等も引止らる又三四日逗留し  
 ていづく發途と言ふ日よあるとお米は勿論築が弟梅吉夫婦を始めとして豫て馴染  
 の藝妓等ほでを濱の波止場へ何れも見送り御機嫌とぞと辭後らに照藏と駒吉は今  
 日出帆乃便船に打乗り發船して日ならず豊前の小倉に至り或旅人宿へ着て爲たれど  
 上田次郎した一件の容易あらざる悪法も如何と思へど駒吉が顔を出された譯をな  
 茶を照藏に金預け何様にう咄して穩便ぬる計らひ方をと頼んだ照藏が香込で



單身上田乃宅へ行き藤右衛門に而會して先年駒吉が不埒談入り御勘辨下さらむ  
 其節の金圓城債ひも旨町噺に演れ上田は名たゝる金満家よて殊に四十の坂も越  
 ぬ城藝妓に欺され金圓を衒られたりと沙汰せられては店の暖簾に疵が付ゆる長崎の  
 四季亭へ一應手紙で掛合ぬのみ例の開進亭へさへ口止をして置程なれを況て其筋へ  
 訴へせせず最早年經し事でもわれを思ひも出せで居る所へ金を償はふと言て來ぬ故  
 彼是の問答もかく其時渡しぬ百五十圓と彼偽証書を引替にして輒々事乃濟たる由に  
 立歸つて駒吉に咄し是で此地の用と濟だがね前もさかから故郷へ歸り突然獨で宅へ  
 這入るを聞か悪うらふと思ふうら序に此身が西乃宮まで送つて遣らふと深切な辭に  
 駒吉と深々歎け私も古郷へ行々前よ下は關と岡山へは是非濟たいと思つて居れば兄  
 貴が同道して下されば彼是都合も宜わすゆゑぬ氣の毒でも御一緒にと言臨に照藏點  
 頭て頓て小倉の宿屋を立山程遠からめ下の關ある久吉かたへ赴けを幸む久吉を大阪  
 うら立歸りある所ゆる照藏はまづ夫婦の者へ初對面の挨拶城做し今度駒吉を故郷ま

で送ることと委しを咄せ夫婦を渠が深切と又駒吉が敗心を感下此所に始く逗留  
 さつて豫て駒吉が懇意よしぬ友達なと城呼集へ酒宴を設けて日を送りはや出帆とい  
 ふに臨みて久吉を供ぐに送る行ぬ思へともいまだ軍夫の計算乃悉皆濟ざる事あ  
 れば心に任せがたしとて船場まで見送を取別て女房お初と頻りに名殘の惜まきて  
 今駒吉が舢に打乗本船として行とさまで渡止場の先へ立出て駒吉をんお國へお歸り乃  
 後をさぞ折く手紙をよみして無事を知らせて下といささ實意の辭も駒吉も慇懃  
 に禮を演爰に袂を分ちてとり二名は日を経て岡山へ着たが彼知一の怒りと解たと思  
 つてと居ながらも遺駒吉は直にを行れず此地にても宿屋に残りて先照藏のみ遣とし  
 たが照藏は古市といふ料理渡世の招牌城當に古田知一方へ行き主人に對面話し上よ  
 て發にはお鶴が病死の時貸金証書と回向料は贈られたる挨拶を演這回駒吉が悔悟  
 せし其趣さぞ一具に咄して渠を詫言召連たる旨慇懃に言入るれば古田を一時は駒  
 吉等城見當り次第折て捨んと大立腹は爲ぬれども漸次に心の解ぬる所へね鶴は病死



殊に又駒吉が改心して詫に來ぬとの咄し媛聞て根が氣ま入りの男でせよれば歡をし  
 げに打笑て渠が態く參つたどあらむ久し振りにて會せせざといふに照藏も歡びて  
 直さま旅宿へ立歸り上首尾あるを駒吉に告て再度渠が同道なし古市の店へ揚ると抱  
 への藝妓媛始めとして仲居や下女に至るまで死んだ物が蘇生つて來でせしぬかと思  
 ふやうに皆見世先へ飛んで出て此所でも駒さん彼所でもヤン駒さんと右左りうら喧ま  
 しい程喋くしを言れる世辭媛駒吉は夫くは挨拶して程なく奥へ打通る媛待設茶  
 てゐた知一がサアく是へとさし招けば駒吉は照藏の尻に付つ、座に通る主人の前  
 に平伏して先年厚いお世話になつぬ御恩媛仇にいたしぬ不始末重く恐入りました  
 が併し素くお鶴さんと密通しぬどぬでとなく家山の次第は是くといふを知一聞  
 わへすイヤ其詫は照藏どのから逐一承知致して媛れを又改免てぬには及むぬ何と  
 捨別改心して今度故郷へ歸るとは此上もなれ見上ぬ心底若年時の過ちは誰とてもの  
 るものにて此身などは五十乃阪へとや手の届々年をしなから一時乃怒りに貴さは達

の行方を頻りに尋ねてせれたが  
 知れあんだ乃が互ひ乃僥倖那  
 時見付て研捨な心我身とても  
 罪は通をす此再會はなるまト  
 きに慎しむべきと色情のぬい  
 よく悔悟の念を忘れず故郷  
 へ歸らば兩親へ厚く孝養を盡  
 そべしと説諭されて駒吉とそ  
 ろに涙乃落るを覺えず御深  
 切なる御教訓何とて忘却致し  
 ませざ然はよりながら國許媛  
 立出てくや長は年月安否を一





度問ま玲ねと親が無事にて故郷に居ますとやら夫さへもと言掛て又泣出すを知一が  
 慰めてイヤ其心配は決して無用和主がお鶴と家出の後若やと思ひ西乃宮へ人を遣は  
 し問合せし又父公の喜兵衛どのとやらが使と俱よ飛で来て何様かふ譯と先から尋ね  
 よ箇様くの不始末と咄した時の父公乃仰天實は是く箇様な譯で故郷を離るた那  
 悴悪いと思へど一粒種今更貴公のお手に懸るを餘所に聞てはをられませぬお慈悲よ  
 命丈ぢやと私にめんどて御勘辨を引はぬばりりよ詫られる親乃心を察しては憤つ  
 た此身が氣乃毒よ思ひ決して見付したりとて手荒奇とはせぬとい偽盟を成たて、  
 見せたので喜兵衛どのを安堵はされたが尙も心に掛るかして半月餘も逗留して俱  
 く行方を探しぬが手掛りさへも聞出されぬ若し安否が知れましたら何分お非知下  
 するやぢにと呉く頼んで歸國の後も度く書面で様子問はれ此程之雁の人の菊  
 田鹿之助といふ者が来て和主の安否を尋ねた時聞て見ぬれと親公達は悲憤は旨を答  
 へぬれば安心せよとの主人の辭に始めて胸を撫えろし飛でせ行ぬき体ある城知一が

れし止め心の急迫は然る事かれと家出遊ちして年久しく親に苦勞城掛た身が許しも  
 受す突然と宅へ歸ると道さく殊更近所の手前など親公が何う斟酌城掛らるゝ場合  
 もないとも言へば和主が今度改心して私が許まで来た事城一應書面で報知て遣ら  
 ば必す親公が歡んで迎ひけ人をと大すも必定然うしぬ上よて歸國せむ萬事都合が宜  
 しからぬと言ぬ城打聞く駒吉のみが照藏へへを現もとい偽故頼て城引寄て是等の  
 次第を細く認免下女に吩咐遠はしく郵便箱に投入せ玲ねはよ餘談に及ぶ程に駒吉  
 と先年中懇意にしたる人乃今はとゞして居るやと聞茶を彼列三郎と言ぬ男は小金  
 を蓄て宅を捕へ今と豆腐を稼業にして女房子とへある趣き又駒吉が病氣中ね鶴が頼  
 んと世話城玲ねた京橋詰のお菊婆アと一昨年の秋病死をする以前駒吉に熱くなつた  
 抱への遊妓里鶴小糸を一名は伊豫乃三ヶ濱へ一名は故郷の大阪へ歸り餘は何をも變  
 りなしと知一が答へた故照藏を姑々残して單身卯三郎方へ行き世話になりたる禮城  
 流で土産と買して廿圓贈り其足よて細屋町ある船乘池尾治兵衛を訪む先年ね鶴と二



個たぐを録りく丸まる龜かめ在あの梅うめ次つぐ郎らう方かたまを落おし吳くれたる深しん切せつを返かへとぐを言い出だて是これよも幾いく許まかの  
 金かねを遣つかはし夫それよア一いっ富ふ士しへ立た寄よりて無ぶ沙さ汰たに家いえ出だの不ふ始し末まつを詫わびの他た知し己じは先さきくを  
 廻まわり盡つくして立た歸かへり此こゝ上うへは西にしの宮みやは返へん事し次じ第だいで發はつ足そくと只ただ夫それのみを待まちて居ゐる○備び物ぶつ詰じり  
 始はじめにかへりて小こ豆まめ島じまなる遠えん藤とう彌や右みぎ衛ゑ門もんと西にし乃な宮みやよア立た兵へい衛ゑ兵べい衛ゑ作さく我われが小こ池いけ村むらへ至いた  
 りしが家か内うちは者ものにも聞きかれぬもつとも密みつ事じなるゆゑにかねてお仲なつ實じつ清せいませ置お置お與よの  
 一ひと間まへ誘いざなひ入いるを立た兵へい衛ゑ兵べい衛ゑは娘むすめ乃な無な事じなる体ていにヤレ嬉うれしやど服はらでさねもへお態おと面おもて  
 よ結い了りょうを現あらし彌や右みぎ衛ゑ門もんどの、お噺はなしで委あ細さいは譯わけと皆みな聞きいゑお思おもひ掛かかひ今こん度どの不ふ  
 仕し多た羅ら羅らは徳とく目めり知しらぬも喇ら音おんにしる其その方かたにしる斯か宮みやまで難な思おもひと思おもはなんだが  
 如い何なにに心こゝろ迷まよへばとて現あ在ざい兄あにと妹いもうとにて此この世よからなる畜ちく生せい追お因いん果くわと肩かたまで身みに孕なす其その  
 漫あ問もんしい姿すがたとは何なに故ゆゑよオノレとあアをばたと白しろ眼め詰じてみ自みづから海うみに臉ま張はた、けは  
 而めん目めあつと恥はづかしとにお仲なつ之の穴あなへも入いア度た思おもひ父ちちさん何なに卒そつ忍にんしてと詫わび辭ことばも口くち乃の  
 初ち果はは平へい伏ふくし泣な入いる所ところへ茶あを汲くみて出でぬ彌や右みぎ衛ゑ門もんが親おや娘むすめ宿しゆく子こを慰なぐさめて更さらに喜よろこ兵べい衛ゑに



打對ひ斯ういふ譯になるかば悔んだ所が詮ない事只人の口は端は掛らぬやうに  
れし包藏より外なし付ていなんど此嬢を私に下さるまいかと敷から捧望されて  
喜兵衛の其意の解がたゞに頓は回答を做し兼たるの此不始末を包藏つき娘を呉  
るやか言のそと問返されて彌右衛門の膝摺寄サア斯うばかりやしては御合點も參る  
まいが今度なるお娘公が千ヶ寺参りと書置を殘して家出をさせたのを世間の人  
の情郎がわつて逃亡せしと思ふは必定仍て機密を匿そおの先頃お宿へ泊つた客にて  
小豆島の何某とお仲さんが通じ合姪姪にあつたお駭いて親の手前の面目なほに宅を  
願出し小豆島なる情郎の許へ至り故其父彌右衛門といふ者より報知によりて彼地  
へ赴き娘は意見を加へても斯うなる上は其男と添はれぬ時の身を投て死ぬとまで當  
人もいひ両親始め其情郎も是非貫ひたいと望まるゝに不釣合なる縁と思へど餘議あ  
く先々遣はしたりと世間へ披露をして置るゝうち此嬢の私が預つて安く産をさ  
す其兒は何所へ遣るとも何様とも形を付た其上よて離縁になつたと歸宅をされなば



別に怪しむ者もなく世間の手前と濟じといふ物其間も能い罅縫子を探して置いて娶合  
せられ別家をさせるとお極めあさるが先上策かとは思いますが外に好い御思案でも  
ありますこと若も別の御考もありはしなれば思案の通りなされぬかとてひ深切  
に言い出たり

以下次號

明治十六年十一月九日御届  
同 十二月二日出版

京都府平民

編輯兼出版人

武田 龜吉

西區阿波座四番町卅番地寄留

發賣元 武田 寶榮堂